



2023年度  
子どもの貧困対策事業報告書

特定非営利活動法人山科醍醐子どものひろば



応援お願いします！

発行 2024年9月  
特定非営利活動法人山科醍醐子どものひろば

〒607-8072  
京都市山科区音羽伊勢宿町33番地77  
Tel 075-591-0877  
Mail kodohiro@gmail.com

## 変わることを変らないということ

私たち、山科醜翻こどものひろばの子どもの貧困対策事業に、温かいご支援をいただき、ありがとうございます。この報告書は、事業として1年間取り組んできたことの報告だけでなく、この事業を応援していただいている様々な方の視点から、事業を振り返っています。それを共有することにより、子どもの貧困解決の一助になればと思います。

さて、この1年の中で、最新の国民生活基礎調査が発表され、子どもの貧困率は前回の調査結果である14%から11.5%に大きく下がりました。7人に1人が貧困状態であった10年前と比較をすると、子どもの貧困は改善してきていることがわかります。2013年に子どもの貧困対策法が成立し、その後、子ども家庭庁の発足、こども基本法の施行など、子どもに関する施策が拡充することで、子どもを取り巻く環境が改善してきた結果であると思います。

一方で、私たちの事業に参加する子どもたちは10年前とどのように変わってきたのでしょうか。活動を卒業していった子どもたちは進学、就職した子どももいます。「こどものひろばがあって良かった」と言ってくれた子どももいます。しかし、生活環境は10年前と変わらず、未だにしんどい家庭もあります。また、新たに貧困状態になった家庭もあります。数字が年々改善しているのは事実ですが、私たちの目の前にいる子どもたちは数字のようにはっきりと改善しているとはなかなか言えません。だからこそ、変わらずに「困った」を抱えている子どもたちに活動を届けていく必要があります。

これまでも「子どもの声が届くこと」を大切にして活動してきました。伝えたいこと、やりたいこと、良いことだけでなく、悪いことも子どもたちが声を出したいタイミングで、その声をひろうことのできる場所に人がいる。そんな場所、地域をこれからも皆さんのお力を借りながらつくっていきたいと思います。引き続き、温かいご支援をよろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人 山科醜翻こどものひろば  
理事長 品田真孝

## 山科醜翻こどものひろばのミッション

地域に住むすべての子どもたちが、心豊かに育つことをめざし、地域の社会環境・文化環境がより良くなることを大きな目的として、活動しています。

子どもと大人が一緒になってものごとに真剣に向き合うことで、“共に育ちあいたい”との願いを大切にして日々取り組んでいます。

あらゆる人にとって、自分らしく生きることのできる、人との交わりを大切にします。

## 子どもの貧困対策事業とは

地域の子どもの豊かな育ちを応援する中で、集団で過ごすことが苦手だったり、学校に行くことができていないという子どもや家庭の声から、2005年より個別サポート事業「楽習サポートのびのび」という活動がうまれました。この活動を続けていく中で、経済的困窮を理由に体験活動への参加費が払えないなどの声も聞こえ始め、子どもたちの困ったを解決するための事業として2010年に「子どもの貧困対策事業」がスタートしました。現在では「暮らし・学習・余暇」という3つのサポート活動を軸に、一人ひとりの子どもの「やってみたい」に合わせた形で活動をしています。

# 2023年度の活動報告

2023年度は、1,256,500円のご寄付をいただき、のべ375回の活動ができました。

## 1. 暮らしサポート

平日の17時から21時に、あそび・夕食・入浴など、日常的な生活をサポーターと一緒に過ごす活動です。子どもの生活に合わせて日中に実施することもあります。年に数回の宿泊活動もあります。

また拠点へ来られない不登校や引きこもりの子どもに対してはアウトリーチ活動として家庭訪問を行っています。



活動回数 176回  
活動参加人数 225人

## 2. 学習サポート

平日の120分、サポーターと一緒にマンツーマンで勉強する活動です。わからないところを一緒に考えたり、勉強方法を模索したりします。宿題や復習以外にも、息抜きにゲームをしておしゃべりする時間もあります。

それぞれが勉強したいことを勉強しつつ、いろんな大人との出会いや、人との交流も大切にする活動です。



活動回数 168回  
活動参加人数 601人  
※中学生学習会の活動も含まれます

## 3. 余暇サポート

土日を中心に、スポーツや体験活動、地域イベントに参加して休日を過ごす活動です。地域のいろんな人の力をお借りして、日々の生活や活動ではできないことにサポーターと一緒にチャレンジしています。普段よりもじっくり時間を過ごすことができるため、それまでできなかった話を深められたり、小さな願いを叶える機会になったりします。



活動回数 31回  
活動参加人数 46人

ここでは活動の様子をダイジェストでお伝えします。

### 安心できる暮らしとは？

夏が終わり、秋ってこんなに冷えたっけと季節の移り変わりを感じるときのこと。

この日は「あー、疲れたー。なあほんまにテストやばいねんけど、」と彼女は言いながら部屋に入って来ました。あ、いつも通りだなと思いつつ、「どしたん？」と話を聞いていると、どうやら外国語のテストが近いことと、テストにライティングの試験があることを知らなかったらしく、それもあって焦っていた様でした。

その後も、バイト明日嫌やなあ、とか、学校の先生の話とか、書類の手続きできた？とか、サッカー日本代表強いとか、そんなたわいもない話をしながら、ご飯を食べて、お風呂に入って、ゆっくりしたら帰る、そんな活動でした。

この日の活動で感じたこと、それは彼女にとってこの活動がガス抜きの場になっていたらしいということ。彼女の頑張りには私たち大人から見てもとてもすごいものです。その反面、心配になる部分でもあります。本来なら、ガス抜きであったり、テストの頑張りをほめてくれる人がいたり、日常生活の愚痴をこぼす場であったり、そういった“あたりまえ”が家庭環境によっては欠けている中で、この活動が彼女のあたりまえの埋め直しをできる場所であればいいと思います。



### みえないところで

活動で夜ご飯を作る時、メニュー決めをみんなでお悩みながら決めていきます。食べたいものを聞いて、帰るまでに作れるものをレシピを探しながら買い出しの準備、動画を観ながら作り方を調べるのがいつもの流れです。

2023年、これまでの活動がなく、同じメニューを3週連続作るという記録を作りました。

記録更新となったメニューは「かきあげ」です。1週目、「今日の晩ご飯どうする？」と中学生に聞くと、事前に食べたいメニューを調べてきていました。「それやったら作るしかないな…！」とサポーターも意気込むも、「人生で初めてのかきあげづくり…」とどうすればいいかわからないところからのスタートでした。

試行錯誤の末に完成したかきあげを目の前に、「これ、また来週もリベンジしたい」と中学生からの声。慣れない中で作ったかきあげ、もうちょっとたくさん作れたかも、具材変えたらもっとおいしいかもと、その時得た反省を胸に、2週目もかきあげ作りが決定しました。

来たる2週目。「家でも作ってみた」と報告がありました。写真を見せてくれて、そこにはおいしそうなかきあげがありました。さっそくみんなでリベンジしたいとのこと、料理の時間に入りました。前回よりさらにおいしそうにできたかきあげ。来週はこれにチャレンジしてみたいと、違う種類のかきあげを3週目も作ることになりました。

週に1度、3時間の活動。そのわずかな時間のために、準備や振り返りを重ねていますが、子どもたちもまた、私たちのみえないところで「どうしたらみんなと楽しい時間を過ごせるか」と準備をしたりしていました。

# サポーターインタビュー ひろばに来ると

語り手：サポーター  
みーちゃん  
聞き手：事業担当者  
ますお

この事業ではボランティアを「サポーター」と呼んでいます。2023年度に大学卒業を迎えたサポーターのみーちゃんとこれまでの活動を振り返りつつ、どんな時間を重ねてきたか、子どもとサポーターにとってどんな場であったかを言語化してみました。

## この活動に来てみて

ますお：小学生の暮らしサポートの活動に入っていたみたいーちゃんですが、まずはどんな活動だったか、教えてもらってもよいですか？

みーちゃん：子どもたちから「これやりたい！」って、すごい積極的に言ってくれる活動だと思うので、そのやりたいに答える形が多かったかなって思います。例えば…最近であればビニールテープを膨らまして風船にするやつあるじゃないですか。それとかスクイズ作りたいて言ったら、確かに最近見るし面白そうやし、やってみたいよねって感じでやることが多いですね。

ますお：いいですね…。ではそこから深掘りしていきましょう。子どもたちと最初に関わった時、どんな感じだったかを語っていただければと思います。

みーちゃん：3年前…。変化の面としては「あれしたい。これしたい」という要望は、あんま変わってないなって思っています。そのやりたいっていうこと、その要望を表に出すすごいエネルギーがあるのは変わらんとは思いました。年齢が上がったからかわかんないんですけど、昔だったらもう取り合いの大喧嘩みたいになるところを、じゃんけんやったり、話し合いやったりでまだ解決できてるのが多くてすごいなとは思いました。

ますお：最初、活動に入ってどうでした？

みーちゃん：今まで出会ったことのないよう



な家庭でした。自分の周りには、意識してなかっただけか、ほんとにいなかったかわかんないんですが、出会ったことのないような家庭で…。

ますお：子どもたちの背景を知らないで活動に入って、何か感じるものがあったということですか？

みーちゃん：そうですね。ぱっと見て、服がちぐはぐな時があったというか、衣類の汚れとか靴の破れとか、服が私は一番わかりやすかったなと思います。

ますお：もう少し具体的に教えてもらってもよいですか？

みーちゃん：やっぱり自分の好きなように服を着ているからちょっと気温に合っていない服装で来る時もあったなっていうのと、靴に穴があいていたり…。自分の経験ではそうなることがなかったからびっくりしたっていうのはあります。

あと、漢字やかけ算とかできないっていうのも、親が宿題を家で見え一緒にやる…みたい

な。自分の家はそうやったりとか、あと周りも、親が宿題を家で見え一緒にやる…みたいな。そういう家が多かったんで、「できない」がここまで育ってきたことがあるんやなっていうのは驚きでした。

## サポーターとして感じてきたこと

ますお：最初の頃の活動の振り返りって、どんな話し合いをしていたか覚えてます？

みーちゃん：そうですね…ご飯の話覚えてます。野菜、めっちゃ嫌いだから全部残すみたいなのとか、好き嫌い結構激しかったですね。オムライスのためにピーマンをみじん切りしたりしてました。他の家庭であれば嫌でもバランスよく出して食べさせてみたいなのがあると思うのですが、偏りのある食事がこの子どもたちにとっては普通でした。「野菜なんで食べなあかんの!？」みたいな。

自分の中では、子どもの食事って割と成長期だから気を遣うのかと思っていたので、カップ麺を下の兄弟たち（乳幼児）が食べる話を聞いていたのでびっくりしていました。

ますお：他に話し合ったことありますか？

みーちゃん：このご飯は食べた、食べなかった。これが嫌やったみたい。ご飯ちゃんと座っては食べられたけど、どうしても手で触ってしまったり…犬食いになってしまうのはやっぱりどうにかしたくて、でもどうすればいいのかなと振り返りで話し合っていたと思います。

ますお：ありがとうございます。活動の大変なところとか子どもたちのしんどいところみたいな話を中心でしたが、活動での思い出や楽しかったことはありますか？

みーちゃん：今思い出したのですが、2年前のハロウィンの時に、子ども自身から「学校で作ったからあげる」と言っておめんもらいました…。その時、めっちゃ嬉しかったです。

ますお：なぜ嬉しかったのですか？

みーちゃん：物をくれるっていう姿が嬉しかったかもしれないです。普段から、みんな分けたお菓子を「誰も絶対取らんといて!」みたいなのがあったのですが、たまに「これ一本あげる!」みたいなのがあったりって、そういった自分のもんやから絶対取らんといてみたいなのがあるのに私にくれたというのは嬉しかったかなと思います。

ますお：他に思い出に残っていることはありますか？

みーちゃん：「やって!」と言われることの方が多かったのですが、子どもがやりたい事だとしても、自分でかき氷とか作って「これ、みーちゃん分」だっけ言われたらやっぱり…。あといつも思うのは、どの活動でもですが、名前呼んでもらえたら、ちゃんと嬉しいなって思います。

ますお：たしかに心に来るものがありますよね…。

## サポーターと子どもの関係性

ますお：自分も最近この活動に入って悩むことが多いですが、活動の中である種の大人を困らせる関わり方が多いと思うのですが、どういう気持ちがあると思いますか？

みーちゃん：かまってほしいが、一番大きいと思います。「自分を見て」…とかなんですかね。やはり反応あったら嬉しいじゃないで



すか。だからやっぱり困らせるのかなと思います。

みーちゃん：私は結構、自分が嫌やったら「嫌やしやりません」みたいな関わり方をしていたから、他のサポーターのところちょっかい出しに行ったりとか。飽きたし自分一人で遊ぼうみたいな感じになるので、そういうのを見るとやっぱり反応もらえたら嬉しいっていうのが大きそうだなと思いますね。かまってほしいってことかなと思います。別に嫌じゃなかったらこっちも反応するし一緒にやろうとなりますし…。

ますお：なぜ、あの子どもたちが毎週飽きずに早く来るのかみたいなのところに結構つながってくるのかなと思います。

「遊びたい！」と子どもが持っている本来の生きる原動力みたいな気持ちと、「甘えたい」という気持ちがミックスしたのが、この大人を困らせたいのかなっていう風になる気もして…。

みーちゃん：確かにありますね。言葉にうまくまとまらないのですが、この活動で、私の精神年齢が下がった気がするんですね。

ますお：どういうことですか？

みーちゃん：子どもたちからすれば、周りには大人だから、みんな言うこと聞いてくれる存在だと見えるのですが、私は割と子どもと同じ立場・目線で、「これなら嫌じゃない」「これならやる」「これはやりたい」みたいなことを私自身が言うことが多くなったな…と。

ますお：なぜそうなったのですか？

みーちゃん：なんでなんですかね…。割と相手のテンションに合わせてやるのが…まあでもみんなそうですよね。割とその相手に合わせにいくものなかなと思うんですが、たぶん無意識に合わせにいていたのかもしれませんが。なんかこう…「ひろばに来た大人」から「ひろばに来た子ども」になっていましたね。

私が子どもになっても、昔であれば嫌だと拒否したら、子どもたちのほうは拗ねてしまうことがあったのですが、そういうのはなくなっただけかなと思います。でも、それがいいのか悪いのかは、ちょっとわからないです。



## 話をするということ

ますお：でも、大人側が変わるっていう部分でいくと歩み寄ってる感がありますね…。

みーちゃん：歩み寄ってる感…前よりか大人としてじゃなくて、同じような立場で全力で一緒に楽しめるようにはなったんじゃないかな…と。

ますお：そこは本質的な気がしています。おそらく今言ってる「大人が子どもになる部分・寄る部分」って、大人を困らせるではないですが、子どもからの「何々して」とか「今これやって」という命令・指示の言葉が多いというのが、普段子どもたちが大人と接するときに投げかけられた言葉の多さというかな…。逆に子どもたちから同じように跳ね返ってきてるのかなと僕には見えていて…。

だから、きっとどんどん命令とか指示じゃなくて、お願い…？お願いも命令の仲間だから、相談とか「これやっていい？」とか、許可とかどンドンマイルドになって、「今これこう思ってんねんけど」とって、言い出したときは、だいぶ時間と成長が経ってるかなみたいな気がしていて、いかに命令とか指示じゃなくてもコミュニケーション取れるかみたいなのところが大事なのかなと感じます。

みーちゃん：自分の要望通らんこともあるし、自分自身も相手の要望を全部飲まなあかんよってわけじゃないというのはみていけたらいいですね。

今の話でいうと確かに、昔に比べたら今のほうが自分から話をしてくれることが多くなりました。イベントの話とか、「今日何やったと思う？」って言って「何があったん？」とか、「次、遠足でどこどこ行くねん」とか、「今日給食おかわりしたん？」って「何食べたん？」みたいな感じで…。

ますお：子どもたちから話をしてくれるってサポーター心くすぐられる話ですが、それだけ信頼関係と、愛情が満ちたりたのかな…みたいなひとつ私たちの通過点な気がしています。

みーちゃん：毎日重ねてこれだ。そういうのが大事なのかなっていうのもあります。

## 一旦、休める場所があれば

ますお：ありがとうございます。では最後に今後の子どもの育つ環境や、活動のこと、ひろばのことでもいいのですが、どうあってほしいみたいなもの、ありますか？

みーちゃん：一概にこれがいいとは、まだちょっと考えられてないんですが、少しでも休める場所が増えるといいですね…。

あれしなきゃこれしなきゃ、今しんどい。自分の家がしんどい状態だから、あれしなきゃこれしなきゃ、ここを一回全部ほったらかして、自分が今抱えてるしんどいのをほったらかして、休める場所が増えてほしいし、休めるポイントを作る大事さっていうのは、もうちょっと、広まってもいいかなと思います。

ますお：子どもたちのどういうところを見てそう感じました？

みーちゃん：たぶん家庭の事情がしんどくな

くても、人間関係でちょこまか悩んだりとか、普通の人やったらあると思うんです。

でもひろばに来てる子どもは、その上にプラスしてしんどいことがあるやろうからこそ、やっぱり休みが必要になるんじゃないかな…と。やっぱり普通に生きていたとしても友達と喧嘩したり悩んだりとかしたら、落ち着いて考えたりする時間が必要かなって思うのですが、でもそれどころじゃない子たちが、多分ひろばにはいっぱいいると思うので…。そういった子どもたちはもっと余分に休むことって必要になるんじゃないかな。

問題解決するために充電する時間って、やっぱり必要かなって思いますし、元気がないまま問題なんて解決できるわけじゃないですか。問題はやっぱり一刻を争うかもしれないんですけど、立ち止まれるなら一回立ち止まった方がいいんじゃないか…。立ち止まる場所というか、「立ち止まってもいい」とっていう感覚は、もうちょっと社会に広まってもいいかと…。これは別に、ちょっとしんどい子ども以外にも、おそらく、どんな人にも言えることだと思います。

日本人ってすごい真面目っていうか、あまり休まないみたいな感じで、世間が休めるようになったらこうみんな余裕持って、気持ちは軽くなったりするんじゃないかなと思います。

ますお：ありがとうございます。



## 卒業生鼎談

# 参加者から卒業生、そしてサポーターとなって

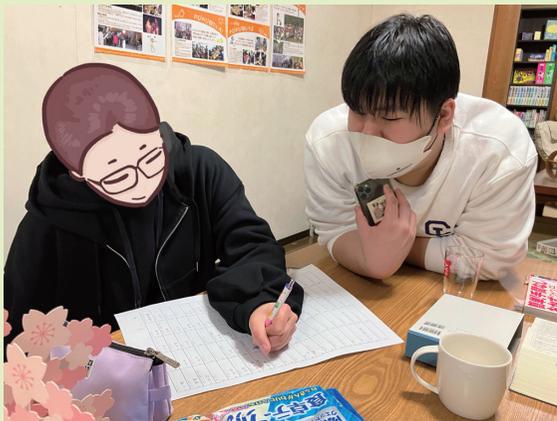
卒業生  
はるさん

卒業生  
けいじゅ

聞き手  
ますお

かつては活動に参加していた当事者として、卒業してからは卒業生として顔を出し、さらにはサポーターとして、子どもと一緒に場をつくる側になったお二人と職員を交えて、7年間を振り返って、それぞれの思いを聞いてみました。

## ひろばに来るまで



ますお：二人に来てもらっていますが、まずはひろばに来てどれくらいかを聞いていてもよいですか？

けいじゅ：僕は中学2年生の秋頃に来て、今22歳になって約7年、丸8年ですかね…。

はるさん：僕も来始めたのは中2からで、同じく7、8年くらいなんですけど、実のところ小学生の時からも関わりがあったので、そこから数えると10年以上は関わっている感じですね…。

ますお：長いですね…。ふたりはいつからの関係ですか？

けいじゅ：小学校時代の同級生です。

ますお：ちなみに同級生の時、どういう関係性でした？

けいじゅ：僕が小学生の転校してきた時に、まず名簿が近かったから仲良くなったって

うのがあります。中学生は同じ部活に入っ…てほぼ毎日一緒でした。学校から帰ってきても一緒でしたね。

ますお：学習会に来たきっかけも教えてもらってもいいですか？

けいじゅ：僕は勉強ができなくて、でも勉強する機会が学校しかなくて、その時学校も不登校気味で、その時にどうしようかなと親と話し合ったら、役所の人がこういう場所があるというのでひろばを教えてもらって、1回試しに行ってみようって感じで…行ったって感じです。

はるさん：けいじゅの紹介があって、毎週来てた感じ…かな。

## ひろばに来るってどんな気持ち？

ますお：なかなか聞けないことで気になるのですが、ひろばに行く時の気持ちってどういう気持ちだったんですか。言い方がわからないけど、自分から行きたい…みたいな気持ちって最初からある人って少ないと思っていて、そのあたり聞きたいです。

けいじゅ：行くってなった時は、最初は塾みたいなのが勉強するイメージで、ちょっとあんまり行きたくないなっていう気持ちでしたね。

実際に行ったら、思った以上にゆるくて、ここだったら自分のペースでも行けるなと思いました。

ますお：思った以上にゆるいって、どういう意味ですか？

けいじゅ：教師と生徒みたいじゃなくて、お兄ちゃんお姉ちゃんが勉強を教えてくれて、結構距離感が近いし、雑談もしたり、お菓子も食べて…。

僕の思っていた、塾に行ったら勉強して、わからないところを教えてもらって帰る…みたいなじゃなくて、来たらずっと雑談かなんかして、勉強やって、その後もみんなでご飯食べたりしてって感じなんです。

はるさん：自分の場合は、学校の窓際でけいじゅと話してる時に、楽しそうやったから行こうかなって話になって行った記憶があります。

けいじゅ：誘った理由は、行き始めて、やっぱりサポーターとしか喋れなくて…僕についてくれてる人が一回休みはって、その時僕は誰としゃべれなくて。じゃあ、仲良いはるさんをお呼びするってなって声をかけました。

ますお：なるほど…はるさんは実際初回の日に来てどうでした？

はるさん：初回の日、行った感じはなんか知ってる人いっぱいいるな…って。

ますお：ということは、今の学習会とはだいぶ雰囲気違うんですね…。



はるさん：活動場所の1階でとりあえず全員集まって、その後にそれぞれ部屋に行って、最後はもう一度みんなで集まっていたので、今とは違ってみんな集まってわいわいがやがやしていました。

## 7年目の節目をむかえて

ますお：お二人とも今の形でのサポーターを卒業する節目を迎えています。今の心境を教えてください。

はるさん：いや、ある意味就職したくないなっていう、ずっとひろばにいて今の環境を変えたくないなっていう…お金は稼がないといけないから働かなあかんけど、ひろばにいたいから働きたくないなみたいな感じ。

ますお：それを思っただけののありがたい限りですね…。ひろばにいたいっていうのはどういう感じなんですか？

はるさん：いつものルーティンががらっと変わるからそれが嫌っていうのがあります。ここに来るのがゼロになるというのが悲しすぎるというか…。

ますお：来ることがルーティンとして当たり前になっていて、それがなくなるのが悲しい心境なんですね…。けいじゅはいかがですか？

けいじゅ：正直…なんでこんな約7年間ずっと来てたんやろうって思ってます。なんで俺が中3になって卒業しても、高校生になってもひろばにいるんやろう…。高校卒業してもなんでひろばにいるんやろう…って。だから、なぜ来てるのかっていうのが未だにわからない…感じなんです。

ますお：はるさんと似ていて、来ることが当たり前だと、なんで来るか確かににわからないですよ。

けいじゅ：でも、やっぱりひとつは、今までお世話になってきたから、その恩返しという

かお返しで参加してるというのもあると思います。といっても、サポーターや子どもたちと会うため…。会って話をするため、ご飯を作るために…うーん、息抜きしに来てる場所もあるかな。



ますお：息抜きというのはどういう息抜きですか？

けいじゅ：やっぱり自分の趣味とか仕事とかその時間にとらわれていて、なかなか人と関わりがないのもあり、あとは仕事のストレスや疲れとか。でもひろばはそういった疲れもないし、ストレスもないし、でいろんな人と関われるし、大人から子どもまで。一度、その仕事とか趣味を忘れられるところ…。と僕はそれが息抜きになっている感じがあります。

はるさん：自分もまあ…普段いつも遊んでいる子どもたちと、また一緒に遊びたいなっていうのがもちろんあるし、いつもしゃべってくれているサポーターとも喋りたいし、ご飯食べたいし、いろいろあるっていうので来てるし、確かに息抜きもしてるなって自分も思います。ここで言うのも悪いですが、けいじゅとゆっくりしゃべる機会がひろばしかないから、ここで喋るっていう目的もあるかもしれないです。

## なぜサポーターになった？

ますお：いや、全然その気持ちもあっていいと思います。参加者として卒業してからサポーターになった経緯を教えてくださいませんか？

けいじゅ：実は卒業してからも勝手に来ていました。来てほしいと誰にも何も言われてなく、勝手に来て、勝手に居続けました…。やっぱり来たい理由になっていたのは、そこに来ている人たちに会いたい、会って話したいが、卒業しても来るきっかけになったのかな。とりあえず時間に来て、みんなと話して、ご飯を作っていました。

ますお：当時からご飯を作っていたのですね。

はるさん：サポーターはいつも来てる子どもたちと関わって、高校生たち（自分たち）は急いでご飯を作っているみたいな…当時、卒業生で来ていた人はいたけど、高校生のサポーターとしてはたまに単発で来るというのはあったかもしれませんが、継続して来たのはたぶん自分たちがこの活動では初めてでした。

ますお：なるほど、初代高校生サポーターなんですね。

はるさん：ちゃんと毎週来て…ただしゃべりに来てるだけかもしれませんが。ちゃんとという言い方も違うと思いますが…最初は卒業生が毎週ただ来てただけだったかもしれないけど、どんどんいろんな手伝いをお願いしてもらったり、当時の職員や大学生のサポーターから「来てるのだったらなにかしよう」みたいな。

ますお：毎週来た結果、サポーターになっていたんですね。けいじゅは卒業して自分から料理をしていたのですか？



けいじゅ：作っていました。中学3年生の高校が決まった後は、自分にご飯作りを始めて、卒業してからもその流れで作ってるみたいな感じでした。毎回、自分の得意料理を食べてほしいってなって思って。最初は今のご飯の時間がお菓子だったけど、お菓子の時間が晩ご飯に変わって、僕ご飯作るの好きだから、一回みんなに食べてほしいなって思っていました。

ますお：はるさんはどういう位置付けで来ていたのですか？

はるさん：最初にご飯食べてただけだと思います。でも、けいじゅが料理するなら、裏でちょっと細々手伝ったり、自分でもできる作業を手伝ったりしてたと思います。

けいじゅ：勉強もしてたよね。その時から。

はるさん：周りから呼ばれて、勉強一緒にやってみる感じで、中学生と過去問解いたりとか。高校3年生になったらそういう場面がだいぶ多くなりましたね。少しずつ勉強を教える以外のサポーターの動きも増えてきたかと思っています。やっぱり中学生の時から関わっていた大学生のサポーターがずっと一緒にしゃべってくれて、問題も作ってくれたりしていたのもあり…。行って友達としゃべるだけっていうのも罪悪感があったけど、職員から「せっかくだらなったら手伝ってほしい」と言ってもらって手伝えることはしますよという感じでいたと思います。

## 子どもへの思い

ますお：参加者からサポーターになったというところで、今話してもらったように、最初から「子どものために」と思って関わりたいから残っていたのではなくて、流れの中で思わず子どもと関わることになって、今現在は関わる子どもに対してどんな思いを持っているのか、そのあたりの心境の変化を聞いてもいいですか？

けいじゅ：うーん。高1の時は、ほんとに子どもたちは眼中になかったです、正直。でも、高2の時に来た中学生と「一回、子どもたちと交流してみようか」と職員から言われ、実際に関わってみると、思いのほか仲良くなれてしまって。そこからここに来る子どもたちに、まずとりあえず一回は何かしら話してみようとなりました。

ますお：最初その中学生としゃべった時はどう感じでした？

けいじゅ：結構中学生の方からしゃべってくれてはいたかな…。そこからお互いの愚痴とか言い合って、勉強教えられへんけど話そうとなり、お互い愚痴を重ねていくうちに、いつの間にか仲良くなってました…。何の話をしたか全く覚えてないけど、愚痴を話したのは覚えてますね…。



ますお：はるさんはどうでした？

はるさん：全然覚えてなくて、実際のところ。最初は多分なくて…高3の時に勉強をしていた中学生がいたんですが、一緒に数学の公立の過去問を解いていて、その時にたぶんしゃべるの楽しいなって。自分が高校生の時に、一番印象に残ってる子どもって、その中学生だから、一緒にしゃべって楽しいなってから、子どもとしゃべりだしたのだと思います。

## サポーターとしての変化

ますお：では、高校卒業してから、活動の準備から振り返りまでするフルのサポーターになってみて、当時の戸惑いとかやってみて感じたことはあったりしますか？

はるさん：とにかく振り返りをするというのが慣れてなくて、高校の時だったら8時半で終わりでそれはそれでよかったけど、そこからさらに残れるのもある意味嬉しかった…けれども子どもの活動のことを思い出すっていう作業がめっちゃ難しかったなというのがあります。当時はコロナ禍だったのもあり、最初はZoomで勉強教えてたイメージもあります。

ますお：たしかに、Zoomの難しさと、Zoomで教えるっていう難しさもあの時ありましたね…。

はるさん：ちゃんと面と向かって子どもとしゃべるのが難しかった。サポーターとしてちゃんと関わるっていうのが初めてだったから、何をしゃべればいいんやろうみたいな感じ。今もそうなんやけど、ただいるだけじゃだめだよな…みたいな感じでした。

ますお：1年目のサポーターとしての関わり方と、4年経ってからの関わり方って、何か違いつつ、逆に変わってない関わり方とかありますか？



はるさん：自分の思い通りにいかなかったことがあって、苦手な勉強ができた、わからない単元をわかりやすくと、いろいろ問題作って頑張っていた時期があるのですが、活動の日になって子どもから「今日勉強やりた

くない」だったり「最初の一問だけががんばるわ」というのが続いたんですね。作った問題が無駄にされたとは思ってないけれど、自分も勉強以外の関わり方ができたらいいんかなって…。

ますお：確かにそんな時期ありましたね…。続きで聞きたいのですが、当時ははるさんが思い描いていたこの活動と今の活動で大切にされていることって、変わったりあるいは変わらなかつたりしていますか？

はるさん：みんな平等というか、子どもがしたいことをもちろんしてもいいし、サポーター、職員がしたいこともしてもいい。自分が子どもだった頃の方が、もしかしたらサポーターはのびのびしてたかもしれないんですが、みんながしたいことをすれば…みたいな感じですかね…。

## 変わらない場

ますお：では最後の質問に近づいてきているのですが、お二人にとってこの7年間はどんな場、時間でしたか？

はるさん：変わらない、落ち着ける場所…みたいな？ 変わらないっていうのはなんていうんやろう…。場所も変わらへんし。

職員とかサポーターとか入れ替えはあるかもしれないですが、同窓会とかしたら絶対戻ってくるし、みんなが集まったらもうあの時に戻る…みたいな感じですね。昔のサポーターとか集まれば昔のひろばになるし…みたいな。そんないつまでも変わらない場所、変わらない家みたいな感じかな。

けいじゅ：この活動か…いい感じに言えないですね…。

ますお：全然まとまってなくてもいいです

けいじゅ：難しいこと言うんですけど、ノートみたいな感じ…。ノートって、一枚一枚めくごとに新しい紙が出てきて。それは一年一年たつに連れて新しいサポーターや新しい子どもたちが来て…でも新しいのは増えていくけど、やっぱり前に残ったページ、今まで

今まで来てたサポーターや子どもたちが卒業したとしても、たまに顔出してくれる復習みたいな感じだと僕は思ってます。

ますお：では最後にもうひとつだけ聞きたいのですが、この活動で残ってほしいものがありますか？

はるさん：一番残ってほしいっていうとアットホーム感みたいな。この活動って子どもと一緒にニックネームつける時あるじゃないですか。自分の場合ははるぼうとか呼ばれてるけど、そんなニックネームで言い合える場所みたいな関係とか、笑って呼び合えるみたいな環境とかは残ってほしいなって思います。

けいじゅ：ますおさんがよく言ってくれてる「けいじゅがいるからこの活動、安心感ある」みたいな…。

ますお：けいじゅがいるからピリピリしないとか、場の空気感がゆるくなるというか。この場で「自分出してもいいかも？」ってなるんですよ…。この場の過ごし方の見本みたいな？

けいじゅ：恥ずかしいんですけど、というより、自分のことを想ってくれる人がいるみたいな…。でも、大前提としてまずこのひろばが残ってほしいんですけど、誰でも気軽にどのタイミングでも来れるっていうのはやっぱり残ってほしいかな…たとえここを卒業したとしても、一人暮らししたけど、たまに実家に帰るみたいな感じで顔を出せるような、そんな感じの雰囲気は残ってほしいです。

ますお：お二人、ありがとうございました。



## おわりに

子どもたちが「活動に来る」ことは当たり前ではありません。それは活動を作る大人を主語に考えた活動の意味であって、子どもにとって「活動に行く」に対してどんな気持ちを持っているのか、大人である私たちには聞いてみるか、普段の姿から想像することしかできません。

どうしても大人としては、活動に来てほしい「理由」や「願い」があります。ひとりぼっちであってほしくない、お腹いっぱいであってほしい、二度と来ない今という時間の中で少しでも満たされた時間を過ごしてほしい、よき未来を選択できるようにサポートしたいなど、その子どもに出会った瞬間からその気持ちは大きくなります。

普段の暮らしから、わざわざ飛び出して「活動に行く」先に、子どもたちが求めているものは何でしょうか。人の目を気にすることなく思う存分遊べること？自分が食べたいものを遠慮なく食べられること？果たして、子どもの求めるものと大人が求めるものは交錯するのでしょうか。

今回の報告書の作成にあたって、サポーターと卒業生に話を聞いてみました。そこで語られるのは、どこまでいっても「人」でした。甘えたい、話したい、愚痴を言いたい、顔を出したい、集まりたいなど、そこには「あの人に」という特定の人がいまいた。

もちろん「あの人と」過ごす時間だけが困りの問題解決になるわけではありません。それでも子どもの育ちや支援にとって、いつか思い出して語りたくなるような今という時間を重ねるための、思いを寄せてくれる「人」が必要です。この事業ではこの出会い、つながりを大切にしていきたいと改めて感じております。

事業担当 三宅正太